

62. ススキに対する塩素酸系除草剤の抑草効果 (II)

長崎県総合農林センター 伊集院 博司

昨年、ススキに対する塩素酸系除草剤の時期別と薬量別の第1年目の効果について報告した。

今回は、これらの第2年目の調査結果と、さらに塩素酸系に弗化物を添加配合した除草剤の薬量別効果についても適応試験を行なったので併せて報告する。

I 時期別効果

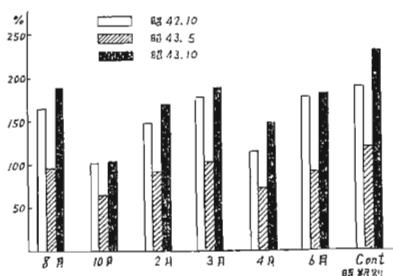
散布時期を年6回に分けて、塩素酸塩含量50%粒剤を1m²当たり30g、40g、80gスポット散布し、処理後の稈数増減を調べたもので、今年は5月と10月に調査した。

第2年目の稈数動向は図-1のとおりで、10月には何れも前年の稈数より上回った。しかし10月散布は最も低く、ほぼ前年並に抑制している。4月散布は10月に増加したが、10月散布に次いで低い率を示した。

ススキの一般的特性をみると、当年の分けつ増稈の約80%が8—10月に発生し、その分が越冬して翌春の成稈となり、翌年の稈数構成の基礎となる。

したがって、前年の8—10月の増稈を抑えた10月と4月散布が他の時期よりも第2年目の稈数を低くした原因と考えられる。

図-1 時期別効果



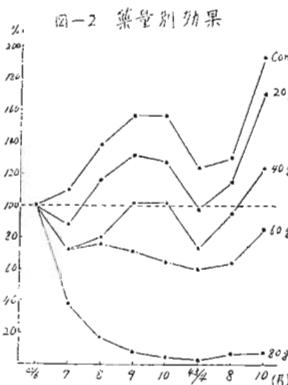
II 薬量別効果

昭和42年6月に塩素酸塩含量50%粉剤を薬量別にスポット散布して、Iと同じ方法で薬効を調べたもので第2年目の結果は図-2のとおりである。

これによると10月段階では何れも前年より稈数率が上昇しているが、薬量の多い程低い率を示している。80g散布では大半が衰退または枯死して、再生力も極めて弱い。60g散布は8月までは当初の50%に抑制されたが、10月に分けつが若干増加した。40g散布は8—10月に急に増稈している。20g散布は無処理と変わらない程増加した。

以上の結果からみると、1株当たり60g以上散布すれ

ば第2年目も抑草効果が期待できそうである。



III 薬種、薬量別効果

(1) 試験方法
塩素酸含量50%粉剤と塩素酸塩含量50%+弗化物10%粒剤を、5月27に夫々1m²当たり20、40、80gスポット散布し、処理後の稈数の生存と増稈数を調べた。

株数は各3株とし、株の大きさは小44本、中59、大92本が平均稈数で草丈は1—1.2mであった。なおこの試験地はヒノキ3年造林地で、傾斜15—20°、B_D—B_D(d)型土壤である。

(2) 調査結果

処理後の稈数経過は図-3のとおりで、両薬種共に80g散布が効果があり、特に弗化物添加剤は9月には当初稈が殆んど消滅した。

塩素酸系20gでは効果が少なく、その他は中間的である。

散布当年の夏の期間までを考えると、両薬種共40g以上散布すれば抑草効果が期待できる。しかし分けつ増稈の抑制を求めるならば、40gでは9月以降の増稈が多くなるのでそれ以上が必要と思われる。

また、両薬種間の差は、弗化物添加剤の方が若干の効果がみられたが、なお施用時期、施用方法等について検討が必要である。

